

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月3日現在

機関番号：11301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K13123

研究課題名(和文)行動経済学的アプローチによる家計運営モニタリング尺度の開発

研究課題名(英文)Development of Family Finance Monitoring Scale

研究代表者

神谷 哲司(KAMIYA, Tetsuji)

東北大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：60352548

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、新たな高次リテラシーとしてのファイナンシャル・リテラシーのひとつとして、家計運営に対する批判的思考態度を測定する家計運営モニタリング尺度を開発することを目的とした。平山・楠見(2004)、廣岡・小川・元吉(2000)、川島(1999)らの批判的思考態度尺度に関する項目を基に作成された52項目をもとに、因子分析を施した結果、「論理的思考・客観性の自覚」15項目、「比較検討」7項目、「好奇心」6項目、「無批判的態度」6項目の4下位尺度からなる家計運営モニタリング尺度が作成され、外的基準との相関から妥当性が検証された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「お金の上手な使い方」を示すファイナンシャル・リテラシーが、消費者に求められるようになっているが、従来のファイナンシャル・リテラシー研究は、旧来の「合理的経済人」(理性的にふるまう消費者)であることが前提となっていた。しかし、現実の消費者は、自らの感覚を重視するなど、非理性的な消費行動をとることが知られている。そこで本研究では、知識の向上を目指すのではなく、自らの非理性的な行動を制御する「批判的思考」に着目し、家計運営における批判的思考尺度を作成した。今後、この尺度を用い、浪費的な消費行動をとる消費者に対する家計運営に関する認知プロセスを明らかにする。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to develop "Family Finance Monitoring Scale" to measure Critical Thinking Disposition toward household economy, which is an aspect of financial literacy. 52 items were generated from the scales of previous studies (Hirayama & Kusumi, 2004; Hirooka et al., 2000; Kawashima & Shiomi, 1999). Factor analysis indicated that the scale has 4 factors, named "Logical Thinking & Objectivity", "Comparison", "Curiosity", and "Non-Critical". And criterion related validity has been confirmed.

研究分野：教育心理学

キーワード：家計 ファイナンシャル・リテラシー 批判的思考 家族 夫婦 子育て

1. 研究開始当初の背景

近年、世界的な経済の自由化、流動化の中で、消費者の自己責任が問われるようになってきている。そうした中、OECDが2008年に「金融教育に関する国際ネットワーク(International Network on Financial Education, INFE)」を組成したほか、アメリカのNCEE、イギリスのFSAなどを中心とし各国で、金融教育(消費者教育、経済教育)が推進されてきている。日本でも、政府は2005年を「金融教育元年」と位置づけ、2009年には消費者庁の発足、2010年には消費者基本計画を閣議決定するなど、消費者教育を強く推進する姿勢を打ち出している(消費者教育推進会議, 2012)。そうした要請の中、各国で各々の事情に合わせたファイナンシャル・リテラシーの尺度が開発され、さまざまな調査がなされているところである。

上記のような背景を踏まえ、ファイナンシャル・リテラシー尺度を作成するため、先行研究を概観したところ、米国におけるNational Council on Economic EducationのFFFL(Walstad & Rebeck, 2005)や、OECDのツールキット(OECD/INFE, 2013)など、海外には多くの尺度があるものの、それらの多くが宣言的なファイナンス知識やファイナンスに関する計算能力を測定するものであり、ファイナンス・リテラシーそのものを測定しようとすることは、人間の知能を測定しようとするような困難さを伴うものであることが示唆され、また、調査研究でも用いられているものは内容領域的に不十分なものが多く、それらの多くは信頼性や妥当性の検証がなされていないことが明らかとなった(神谷, 2016, 2017a)。さらに、さまざまなファイナンス教育の成果については、それほどファイナンシャル・リテラシーの向上や合理的な経済活動に結びついておらず(West, 2012)、人間の経済活動、消費者行動は極めて非合理的なものであることが知られている(Ariely, 2009)。そうした中、行動経済学では、人間の非合理的な経済活動には、さまざまな認知バイアスが存在することが明らかにされてきており、非合理的な経済活動への対策として、人間の持つ認知バイアスに着目する必要があることが指摘されている(West, 2012)。

このような日常的なバイアスに対しては、批判的思考が有効であることが知られており(平山・楠見, 2004; West et al., 2008)、実際に、多重債務者の特徴のひとつとして挙げられる、「金を返すために借り続ける」という、即自的現在消費への満足感に価値を置く態度は、行動経済学における現状維持バイアスに該当するという指摘もある(嶋田, 2010)。

現在、日本においても行動経済学研究は盛んであり、意思決定過程についてのプロスペクト理論やゲーム理論などが多く取り扱われている。しかしながら、行動経済学は同時に、より広く保険・年金や問題商法もテーマに含むものであり、金融教育、経済教育の必要性を説くものでもある(子安・西村, 2007)、個人の消費行動を説明する学問であり、「家計」という生活単位を扱うものではない。また消費者心理学においても、その傾向は同様であり、消費行動の一つの単位としての「家計」に主眼を置いたものは寡聞にして見られていない。一方、家政学における家計研究では、個々の家庭経済のマネー・フローやストックを扱うものの、そこで扱うデータは家計調査による流入の具体的な「金額」と「購入品目」であり(御船, 2007)、なぜそのような支出や貯蓄がなされたかという意思決定プロセスや、それらの行動に対する意識といった心理学的な側面には言及していない。このことから、「家計」という生活単位での消費行動や意思決定を扱う、「家計心理学」の必要性が提唱されている(神谷, 2016)。

2. 研究の目的

前述の神谷(2017a)は、ファイナンシャル・リテラシーの定義と尺度を概観し、従来のファイナンシャル・リテラシーが、伝統的な経済学における「合理的経済人」(Altman, 2012)を前提としていること、しかしながら、現代の経済学においては、上述の行動経済学をはじめ、限定合理性(Simon, 1957)に基づく考え方が主流となっており、認知的倏約家としての消費者像へと転換してきていること、その中で、リテラシーの意味そのものも変容し、批判的思考を土台とした高次の市民リテラシーとして位置づける必要を指摘している(神谷, 2017a)。

そこで、本研究では、家計運営に関する批判的思考を「家計運営モニタリング」とし、その尺度を開発することを目的とする。この尺度が開発されることによって、神谷(2016)によって提唱されている家計心理学研究に資することはもちろん、目下、ニーズが飛躍的に増大している金融教育や消費者教育においても、多重債務者のような経済的に非合理的な判断を行ってしまう人々を対象とした、その心理メカニズムの解明や予防教育に役立つものと思料される。

3. 研究の方法

調査方法

インターネットを介した質問紙調査を実施した。(株)クロスマーケティングのリサーチ専門データベースに登録されたモニターを対象に、性別、年齢の偏りを防ぐために、20歳代から60歳代の10歳刻みで5群、性別で2群の計10群に均等になるようにデータを収集することとした。また、家計管理については、未婚・既婚が大きく関連することが考えられたため、平成27年の国勢調査データに基づき、各年代男女の既婚率を算出し、各群の未婚者・既婚者の比率を決定した。調査時期は2019年2月21日-22日であり、1821名のデータが収集された。分析

ソフトについては SPSS25.0J を用いた。

質問項目

家計運営マネジメント尺度 批判的思考態度に関する尺度である平山・楠見(2004)の「論理的思考への自覚」「探求心」「客観性」「証拠の重視」の4因子33項目、廣岡・小川・元吉(2000)によるクリティカル・シンキング志向性尺度の「客観性」「誠実さ」「探求心」の3因子27項目、川島(1999)の批判的思考態度尺度「思考への自信」「バイアス」「知的好奇心」「思考の不安定性」「思考の利己性」「思考の成熟性」の6因子34項目を参考に計52項目作成した。

ファイナンス満足度 Serido et al. (2013) で用いられていた「私は自分のお金の使い方について満足している」など、自分のファイナンスについての満足度や心配について尋ねた3項目を日本語訳して使用した。「そう思う(5)」～「そう思わない(1)」の5件法。

ファイナンス行動 Shim et al. (2010) で用いられていた「前もって決めた予算の範囲内でお金を使う」など、ファイナンスに関する5項目を日本語訳して使用した。「いつもしている(5)」～「まったくしていない(1)」の5件法。

ファイナンス効力感 神谷(2017b)で作成された32項目を尋ねた。ただし、今回の分析では、適正なサンプルを抽出するための指標としてのみ用いた。

認知欲求尺度 神山・藤原(1991)による、努力を要する認知活動に従事したり、それを楽しむ内発的な傾向を測定する尺度であり、1因子15項目で構成されている。「非常にそうである(7)」から、「まったくそうでない(1)」までの7件法。この尺度は、Toptak & Stanovich(2002)や Kardash & Scholes(1996)などで、批判的思考課題と正の相関がみられている。

不快情動回避心性尺度 福富・小川(2005)によって作成された尺度であり、ある出来事によって喚起される不快な情動(抑うつ・不安)、またそれに伴う苦痛をしっかりと実感し、自らのものとして受け止めることの困難さ、つまり、“不快情動との直面の困難さ”を表す心理的特性を示す。これは、回避・否認といった対処行動そのものではなく、その背景に存在する心性として想定されるものである。1因子10項目。「非常にあてはまる(7)」から「まったくあてはまらない(1)」あまでの7件法。

REC scale 佐々木(1984)による12項目からなる尺度であり、消費者の購買態度を、合理性(R尺度)と情緒性(E尺度)の2つの下位尺度から測定するものである。

フェースシート 回答者と配偶者の年齢、職業、就業形態、および結婚歴、家族形態、夫婦の居住形態、子どもの年齢・子どもの性別を尋ねた。

ライスケールと画面表示時間に拠るサンプルの選抜

オンライン調査においては、調査協力者が調査に際して応分の注意資源を割かない回答である「努力の最小限化」(Krosnick,1991;三浦・小林,2015)が、問題となっている。本調査では、そうした協力者を検出するために、1)ライスケール2項目の設定と2)入力画面のモニタ表示時間の2つの指標を用いた。結果、本調査で使用するデータは875名(有効回答率48.1%)となった。

倫理的配慮

実施にあたり著者の所属組織の研究倫理審査委員会による審査と承認を得た。調査は無記名方式であり、回答の中断が可能であった。インターネット調査は、パスワード管理をされ、アクセスと入力は一回に制限され、回答のコピーや印刷ができないように設定された。従って、回収調査票は生じず研究者は個人を特定できないため、調査の匿名性は担保されている。

4. 研究成果

平均値±1SDの値で天井効果、床効果を確認したところ、「aq1_14 大きな金額の買い物をするときには、さまざまな商品をじっくりと比較検討する。」という項目で、M=4.11, SD=0.915と天井効果が確認されたが、大幅に逸脱するものではないと考え、52項目すべてを用いることとした。

52項目を用いた最尤法による因子分析の結果、固有値の減衰は、17.389, 4.053, 2.426, 1.650, 1.401, 1.240, 1.063, 0.993…であり、若干、6因子で肘がみられたことから、6因子に指定して最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、因子負荷量.40以上を基準として、因子のまとまりを見たところ、11項目がいずれの因子にも負荷量が.40未満であり、二重負荷が3項目あった。また、第5因子、第6因子は2項目ずつであったので、尺度としては不十分と考え、削除することとした。ただし、第5因子は、「23家族のお金の使い方について決めるときには、独断的でがんこな態度にならない。」「46家計運営について考えるときには、1つだけの考え方に縛られない。」の2項目で、ともに柔軟性に関する項目、第6因子は「28家計の運営に関することは、複雑な問題であるため混乱してしまう。」「47お金のことについては、落ち着いて考える余裕がない。」といったお金に対する対処困難度を意味していると考えられた点は指摘しておきたい。

表1 家計運営モニタリング尺度の因子分析結果

| | F1 | F2 | F3 | F4 |
|---|------------|------------|------------|------------|
| 7家計の収入・支出の流れについて、正確に把握している。 | .90 | -.11 | -.15 | .01 |
| 30家計の管理や運営について、順序立てて考えている。 | .80 | -.06 | .07 | -.04 |
| 50基本的な家計の運営方法について、だれにでも説明することができる。 | .79 | -.15 | -.01 | .04 |
| 13家計の収入・支出のバランスについて、感覚的でなく筋道を立てて考える。 | .78 | -.01 | .03 | -.05 |
| 21いつも家計の収支のバランスについて気を配っている。 | .74 | .00 | .04 | -.05 |
| 45家計運営にあたっては、常に貯金や資産、負債の金額を考えている。 | .70 | -.01 | .06 | -.02 |
| 49自分のお金の使い方については、道筋を立てて考える。 | .67 | .18 | -.04 | -.05 |
| 51根拠に基づいた消費行動をとる。 | .63 | .19 | -.10 | -.03 |
| 38難しいお金のやりくりに対しても、放り投げずに取り組み続ける。 | .61 | .05 | .08 | .03 |
| 36家計について考えるときには、客観的な事実や証拠を重視する。 | .56 | .16 | .09 | -.04 |
| 8自分や家族の将来のお金の使い方について建設的な提案をしようとする。 | .56 | .02 | .21 | .00 |
| 31家計やお金の使い方について、自分の使い方が正しかったかどうか振り返るようになっている。 | .49 | .04 | .20 | -.04 |
| 18家計運営に関してその方針を決めるときには、客観的な態度を心がける。 | .46 | .13 | .17 | -.01 |
| 39自分のお金の使い方について話し合うときには、自分が常に正しいと思って話をしている。 | .43 | -.05 | .09 | -.34 |
| 42家計に関することは、いろいろと調べたり、注意深く考えたりする。 | .42 | .09 | .37 | -.06 |
| 14大きな金額の買い物をするときには、さまざまな商品をじっくりと比較検討する。 | .02 | .83 | -.11 | .02 |
| 34商品やサービスの購入にあたっては、できるだけ多くの情報や事実を集める。 | -.08 | .82 | .06 | .06 |
| 17なにかを購入する際には、さまざまなメーカーや商品を比較する。 | -.08 | .78 | .02 | -.08 |
| 27商品の購入にあたっては、しっかりと集中して吟味する。 | .15 | .76 | -.14 | .02 |
| 10オススの商品を買うときには、それが自分にとって本当に必要かどうか吟味する。 | .21 | .60 | -.05 | .02 |
| 25何かを買うときには、さまざまな商品やサービスについて知りたいと思う。 | -.17 | .60 | .36 | .05 |
| 6なにかを買おうとするときには、思い込みだけで決めず、あれこれと考える。 | .04 | .60 | .09 | -.06 |
| 4家計の管理運営に関する話題については、どんなことでももっと知りたいと思う。 | .04 | -.04 | .84 | .00 |
| 43家計の管理や運営方法について、いろいろなことをもっと知りたいと思う。 | .03 | -.03 | .82 | .00 |
| 44自分の資産を増やすための運用方法を学びつづけたと思う。 | .01 | -.07 | .70 | .04 |
| 1家計の管理運営にあたっては、さまざまな商品やサービスについて知りたいと思う。 | .01 | .12 | .70 | .01 |
| 12生涯にわたり、お金の使い方について学びつづけたと思う。 | .11 | -.04 | .68 | .04 |
| 9お金のことでわからないことがあると調べたり、誰かに質問したくなる。 | .10 | .16 | .43 | .02 |
| 33どうしても欲しい商品が見つかったら、別の商品と比較検討することなく買ってしまう。 | -.08 | -.07 | .03 | .64 |
| 24素晴らしいと思った商品であれば、あれこれ詮索したりはしない。 | .13 | -.08 | -.02 | .64 |
| 2一度、買おうと決めた商品を、あとで改めて考え直すことは難しい。 | -.04 | .07 | .00 | .57 |
| 29お金を使うときには、「欲しい」という自分の気持ちに正直である。 | .07 | -.20 | -.02 | .54 |
| 48大手メーカーや一流企業の商品だからという理由で、あまり考えないで購入することがある。 | -.03 | -.14 | .13 | .43 |
| 19家計運営については、自分が正しいと思うようなやり方だけで進めていく。 | .39 | .02 | -.05 | .33 |
| | F1 | .66 | .70 | -.14 |
| | F2 | | .66 | -.15 |
| | F3 | | | .03 |

残った 34 項目を用い、4 因子に指定して再度、最尤法プロマックス回転による因子分析を施した結果、表 1 のような結果が得られた。第 1 因子は、「30 家計の管理や運営について、順序立てて考えている。」「36 家計について考えるときには、客観的な事実や証拠を重視する。」と

いった論理的な思考や客観的な姿勢についての自覚であり、「論理的思考・客観性の自覚」と命名された。また、第2因子は、「14 大きな金額の買い物をするときには、さまざまな商品じっくりと比較検討する。」「27 商品の購入にあたっては、しっかりと集中して吟味する。」といった項目から、「比較検討」因子、第3因子は、「43 家計の管理や運営方法について、いろいろなことをもっと知りたいと思う。」「1 家計の管理運営にあたっては、さまざまな商品やサービスについて知りたいと思う。」といった項目から構成されるため「好奇心」、第4因子は、「2 一度、買おうと決めた商品を、あとで改めて考え直すことは難しい。」「29 お金を使うときには、「欲しい」という自分の気持ちに正直である。」といった項目から「無批判的態度」と命名された。

「論理的思考・客観性の自覚」15項目、「比較検討」7項目、「好奇心」6項目、「無批判的態度」6項目について、それぞれ、家計運営マネジメント尺度の下位尺度を構成すると考え、これらの項目の平均値を下位尺度得点とした。各下位尺度の内的整合性は、「論理的思考・客観性の自覚」 $\alpha=.92$ 、「比較検討」 $\alpha=.89$ 、「好奇心」 $\alpha=.88$ 、「無批判的態度」 $\alpha=.68$ であった。無批判的態度が若干低かったが、許容範囲と考えそのまま分析することとした。

まず、論理的思考・客観性の自覚は、ファイナンス行動や REC スケールの合理性と中程度の相関を示し、ファイナンス満足感や認知欲求尺度と低い相関係数を示していた。ファイナンス行動には、「前もって決めた予算の範囲内でお金を使う。」、REC スケールの合理性尺度には「買うのは必要最低限にとどめておく。」などの項目があり、いずれも、自らの家計運営について論理的、客観的にとらえた帰結としての行動を示すものであり、中程度の関連がみられたものと考えられる。また、ファイナンス満足度には、3項目のうち2項目が、「私はお金の支払いについて困難を抱えている。」「私は常にお金のことにに関して心配をしている。」という逆転項目であり、論理的、客観的にとらえているからこそ、そうした困難や不安を抱えずに済んでいることが示されているといえるだろう。また、そうした論理的、客観的な態度は、認知欲求尺度に見られるような、考えることを楽しみ、難しい課題に対しての取り組みようとする姿勢が関連しているといえるだろう。

表2 家計運営モニタリング尺度の下位尺度と外的基準との相関係数

| | F1論理的思考 | F2比較検討 | F3好奇心 | F4無批判的態度 |
|------------|---------|---------|---------|----------|
| ファイナンス満足度 | .24 *** | .01 | .00 | -.07 * |
| ファイナンス行動 | .62 *** | .32 *** | .42 *** | -.08 * |
| 認知欲求尺度 | .36 *** | .15 *** | .27 *** | -.13 *** |
| 不快情動回避心性尺度 | -.03 | .09 ** | .08 * | .22 *** |
| REC_ScaleR | .43 *** | .50 *** | .36 *** | -.17 *** |
| REC_ScaleE | .01 | -.07 † | .14 *** | .31 *** |

† $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

N=875

また、比較検討は、REC スケールの合理性尺度と中程度の相関があったほか、ファイナンス行動と低い相関が、認知欲求尺度とも極めて低い相関がみられていた。もとより、REC スケールの合理性には、「できるだけ多くのものと比較したうえで買うものを決める。」といった比較検討に関する項目が含まれており、概念の共通性が指摘されることから中程度の相関が示されたと考えられる。また、こうした比較検討は、論理的、客観的な家計運営の態度と合わせて、ファイナンス行動や認知欲求とも関連しているものと思われる。

好奇心も、ファイナンス行動、REC スケールの合理性、認知欲求尺度と中程度から低い相関係数を示しており、因子間相関の高かった先の2つの下位尺度と同様、じっくりと困難な課題に取り組む姿勢をもって、合理的な購買行動をとることで、健康的なファイナンス行動につながっていることがうかがえている。

しかし、無批判的態度は、先の3つの下位尺度とは異なり、因子間相関も低く、比較的独特的な下位尺度であるといえる。「素晴らしいと思った商品であれば、あれこれ詮索したりはしない。」「お金を使うときには、『欲しい』という自分の気持ちに正直である。」といった態度は、REC スケールの合理性や、認知欲求とは極めて弱いものの負の相関を示し、REC スケールの情緒性や自身のネガティブな情動とは向き合おうとしない不快情動回避心性と弱い正の相関を示していた。REC スケールの情緒性には、「ムードや情緒を重視して買う」あるいは「見た感じとか美しさを特に重視して買う」といったムード指向を含むものであり、合理性とは独立のものと考えられている(佐々木,1976)。また、不快情動回避心性とも弱い正の相関がみられていたこと、REC スケール合理性や認知欲求尺度と極めて低いながらも負の相関がみられていたことから、新たな情報を求めようとせず、自らの頭で考えるよりも、自分の気持ちを大事にして

感覚的に家計についてとらえようとする態度であると考えられる。

以上より, 外的基準と関連のある家計運営マネジメント尺度が作成されたものと思料される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

1. 神谷哲司 (2018). 成人期男女におけるファイナンス知識・行動・満足度の横断的検討. 東北大学大学院教育学研究科研究年報,66(2),173-187. (査読無)
2. 神谷哲司 (2017a). ファイナンシャル・リテラシー尺度開発の現状と課題. 心理学研究,87(6),651-668. DOI.org/10.4992/jjpsy.87.15401 (査読有)
3. 神谷哲司 (2016). ファイナンシャル・リテラシーに関連する概念とその尺度について. 東北大学大学院教育学研究科研究年報,65(1),119-134. (査読無)

〔学会発表〕(計8件)

1. 神谷哲司 (2018). ファイナンシャル・リテラシーと夫婦関係満足 —ファイナンス知識・効力感・満足を用いた夫婦ペア・データによる分析—. 日本心理学会第 82 回大会 仙台 2018年9月
2. 神谷哲司(企画・司会)・若松養亮・菅原ますみ・福丸由佳・荻野佳代子 (2018). 国際化・流動化時代における成人期発達研究の課題と展望. 日本発達心理学会第 29 回大会 大会委員会企画シンポジウム 仙台 2018年3月.
3. 神谷哲司 (2018). 夫婦のファイナンス知識と夫婦関係満足度との関連—夫婦ペアデータによる分析—. 日本発達心理学会第 29 回大会 仙台 2018年3月
4. 神谷哲司 (2017b). 成人を対象としたファイナンス効力感尺度の開発. 日本教育心理学会第 59 回総会 名古屋 2017年10月.
5. 宇都宮博・永久ひさ子・東海林麗香・倉持清美・神谷哲司(指定討論) (2017). 夫婦関係をめぐる生涯発達の研究の展望① —結婚から子どもの誕生にかけて—. 日本家族心理学会第 34 回大会 大会企画ワークショップ 宇都宮 2017年9月.
6. 神谷哲司 (2017). 成人期男女におけるファイナンス知識・行動の横断的变化. 日本発達心理学会第 28 回大会 広島 2017年3月.
7. KAMIYA Tetsuji (2016). A review of definitions and measurement scales for financial literacy. 31st International Congress of Psychology. Yokohama (JAPAN) July. 2016.
8. 神谷哲司 (2016). 家計管理・運営に関する夫婦間相互調整と結婚満足度. 日本発達心理学会第 27 回大会 札幌 2016年5月.

〔図書〕(計5件)

1. 神谷哲司 (2019) 育児期の夫婦関係と支援. 白井利明(編著) 生涯発達の理論と支援. 金子書房. 印刷中
2. 神谷哲司 (2019) 「父親の育児参加は増えているの?」「男性は本当に育児に向いていないの?」 沼山博・三浦主博(編著) 『子どもとかかわる人のための心理学』 萌文書林. pp221-228.
3. 神谷哲司 (2019) 子育て環境の社会状況的变化. 本郷一夫・神谷哲司(編著) 子ども家庭支援の心理学. 建帛社. pp.62-71.
4. 神谷哲司 (2018). 量的データのまとめと検定. 本郷一夫(編著). 実践研究の理論と方法. 金子書房. pp.97-106.
5. 神谷哲司 (2016) 乳幼児期から児童期にかけての子どもの成長と夫婦関係. 宇都宮博・神谷哲司(編著). 『夫と妻の生涯発達心理学』 福村出版,pp.146-157.

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名: 熊谷龍一

ローマ字氏名: KUMAGAI, Ryuichi

所属研究機関名: 東北大学

部局名: 教育学研究科

職名: 准教授

研究者番号 (8桁): 60422622

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。